

二〇二六年度 武蔵大学 人文学部 ヨーロッパ文化学科
 総合型選抜入学試験【学科適性重視方式】

試験日：二〇二五年一〇月二日(日)

試験時間：九時二〇分～一〇時五〇分(九〇分)

【外国語問題と日本語小論文】

次の文章はルネサンスにおける「積ん読」(書籍を手に入れても積み重ねておくだけで読まないこと)について述べたものである。文章を読み、あとの問いに答えなさい。

阿呆を乗せた船がゆく。向かうところは阿呆の楽園ナラゴニア。船の上には愚者、うすのろ、道化、各種の偏執狂どもが押すな押すなの大混雑、その重みで船体を川面深く沈めている——シュトラスブルク生まれの詩人セバステイアン・ブラントの『阿呆船』(*Das Narrenschiff*)。ドイツ語初版一四九四年)は、世にあふれる愚か者どもの千姿万態を実に一二章にわたって取り上げ、強烈にこきおろした風刺文学の傑作である。なかでも船頭のごとくに阿呆の群れの先頭を行くのが、開巻(かいかん)劈頭(へきとう)の第一章で笑い飛ばされる「愛書狂」(ビプロマニア)だ。

「書物の無益なること…もし全ての著述家たちを読破せんなどと欲する輩がいたら、書籍の雪崩に飲み込まれるか、あまりに多岐多様な内容に押しつぶされるかだ」(一四九八年ラテン語版 *Stultifera Navis* sig. b.iii.)。

読めもしない多量の本を後生大事に抱え込み、賢くなったつもりでいる手の付けられない阿呆である。いや、他人ごとではない。手に入れたはいいけれど、読めずにうざ高く積みあがった本の山。その心理的な高さは時にエベレストを凌駕することもある。

世にいう「積ん読」の①慣習はいつからはじまったのだろうか。確かにすでに古代ローマ時代、たとえば②哲学者セネカが「持ち主が表題だけでも一生かかっても読み切れない万巻の書物や文庫に何の意味があるう」(『心の平静について』第九節・第四一七、大西英文訳)と記していた。だが、一部のエリート心の平静の問題ではなく、広く一般社会の風刺対象になるのは印刷術の発明以降であろう。

そもそも積ん読を実践する(?)には、本が物理的に大量に手に入らなくてはならない。書物がパピルスの巻物であった古代には、既読・未読にかかわらず本とはそもそも積みんで保管するものであった。けれども表面しか記述できなかった卷子本(volumen)から、紙葉の両面を活用可能な我々に馴染みの冊子本(codex)への移行が進むと(四世紀後半)、一冊に収録できる情報量は飛躍的に増加した。さらに、高価な羊皮紙から安価な紙へと③媒体が変わり、そこに活版印刷術による大

量生産が加わると、書物へのハードルはぐっと下がる。入手が容易になればなるほど、うず高く積まれる本の高は増してゆく。

ではどんな書物が好んで積まれたのか。「積ん読目録」なるものが存在するわけではないので詳細は不明だが、ルネサンス時代に圧倒的な出版部数を誇ったのが古典古代の作家であったことは一つのヒントになろう。なかでもキケローの著作が群を抜いていた。印刷術が発明されてから約一世紀半のあいだ、彼の作品だけで実に二〇〇万部あまりが刷られたと推定されている。その何割かが積ん読の「築山」を形成するための恰好の材料になった⁽⁴⁾可能性は否定できない。(中略)

阿呆を乗せた船が行く。阿呆の楽園ナラゴニアを目指して――。なるほど、読めもしない本をうず高く積み上げて、ひとり賢くなった気ているのは、愚にもつかない所業かもしれない。けれども同じ「積ん読」であっても、ペトラルカのようなケースだってある。

この「人文主義の父」は、古典の原典に肉薄したい、とりわけプラトンの哲学対話を原語で味読^{みどく}したいとの一心から、四十路^{よそじ}を手前にして一念発起し、ギリシア語の習得に邁進した。それは人文主義者の中でもっとも早い取り組みであった。結果的には初心者レベルを超え出ることなく終わつたようだが、それでも、いつか憧れの哲人と書物を通じて⁽⁵⁾対話^{たいわ}できる日を夢見て、ペトラルカはプラトンの著作をせっせと集めつづけた。満足に読めなくても、写本入手の機会は決して逃さなかった。この場合、知的オーラを発する未読の書籍の高が、勉学のモチベーションを鼓舞するまたたない賦活剤として機能していたのだ。

(桑木野幸司『ルネサンス―情報革命の時代』ちくま新書、二〇二二年より。出題に際して一部改変した。)

問一 傍線(1)～(5)の単語を、英語・ドイツ語・フランス語のいずれかを選んで訳しなさい。ただし、必ず同一の言語で解答すること。

問二 「積ん読」の慣習がルネサンス時代に広まった過程を筆者はどのように説明しているか、一五〇字程度で簡潔にまとめなさい。またインターネットの発達などによりルネサンス時代よりもいっそう情報が溢れかえっている現代の状況を踏まえて、「積ん読」についてあなたがどのように考えるか、あなたの経験や大学でのこれからの学びを念頭に置いて八五〇字程度で論じなさい(全体を一〇〇〇字程度でまとめること)。